

シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

第5回、未来の図書館 研究所シンポジウムの開会でございます。最初に一言、ご挨拶を申し上げます。

本年も、ご登壇いただく柴崎さん、三田さん、そして Zoom, YouTube でつながってくださっている皆さまのおかげをもちまして、このようにシンポジウムを実施する運びとなりました。今年はやもやということが現実となり、コロナ・パンデミックで本当に大変な年になりました。なお事態は収束に向かっているわけではございません。「ウイズコロナ」という妙な表現が日常になっております。しかし、まさにそうした困難なときにこそ、人々が孤立せず、十分に語り合える会合・シンポジウムが必要かと存じます。ただし、この状況では、皆で集まってお酒を酌み交わすことから生まれたシンポジウムの由来のように一堂に会することはできません。ウェブシンポジウムの形となります。手法に馴染みがなく、種々面くろうことも多そうですが、本日の機会を有効に活用し、なんらかの成果をつかみとっていただければと願う次第であります。まずは、ご参加いただいたすべての方々へ、御礼を申し上げ、ご挨拶にかえさせていただきます。

シンポジウムの進行の約束については、後ほどさらに説明申し上げますが、ここからはコーディネーターとして、私のほうから、今回のシンポジウムの趣旨について説明いたします。

未来の図書館 研究所のシンポジウムでは、これまで図書館の今後のあり方を展望するテーマを設定してきました。図書館がこれからの世界において、未来をどう確保するかという観点であります。継続してこの会合にご参加いただいている方にはご案内のところではありますが、少し説明いたしますと、これまで私どものシンポジウムでは人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動と、もう一つ、図書館の未来を確かなものにするための図書館活動を、議論してきました。この二つは、重なるものでありますが、視点に若干の違いがあり、前者は、図書館の社会的役割に目を向け、これまでのテーマでいえば、第2回の「図書館とソーシャルイノベーション」の場合のように、図書館が社会革新にどのように貢献するかを議論するものです。また後者は、図書館自体に焦点をあて、その未来を確保するために用意しなくてはならないことがらを議論しております。昨年度のテーマ「図書館とランドスケープ」は后者であります。図書館を今後とも人々に快適に活用してもらうためには適切なランドスケープ設計が必要だとしたものです。

今年のテーマ、「図書館とレジリエンス」であります。図書館自体がレジリエント、つまり、災害や混乱などの状況を乗り越え成長してゆくことと、また図書館が人々やコミュニティのレジリエンスを確保してゆくという二つの議論があり、双方にまたがるものですが、どちらかといえば、人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動のほうに重心があるかもしれません。そのようにご理解いただければと存じます。

さて、今回のテーマ「レジリエンス」とは第3回のテーマでした「サステナビリティ」と並

んで、今後の世界を考えるための重要な概念であります。サステナビリティについては第3回のシンポジウムで定義しましたから、おさらいではありますが、その際、「サステナビリティとは環境や経済、社会のバランスを考え、世の中全体を、持続可能な状態にしてゆく考え方のこと」と定義していました。皆さんご承知のとおり、私たちの社会は産業革命以来の急速な発展を重ねて、20世紀以降、経済成長に伴う人口の爆発、環境破壊などを進行させてしまいました。その結果、いまや人類が豊かに生存し続けるための基盤である地球環境には、限界がみえてきました。状況は、持続可能なものか、サステナブルかという問題になってしまいました。また、地球上にはなお多くの人々が決して十分な生存条件を確保できていない状況もあり、そうした部分の人々を誰一人、置いてきぼりにせずに開発も進めてゆくという条件のもとで、われわれの生存を持続可能にしてゆく必要があります。国際連合、国連では、この状況を捉えて、このスライドにあるように17の目標を掲げ、2016年から2030年までの15年間にそれを達成しようという計画を立てました。エス・ディー・ジーズ (SDGs : Sustainable Development Goals) という「持続可能な開発目標」です。いまや、サステナブルな社会を構築することは世界的な合意でありまして、図書館界、その代表である国際図書館連盟 (IFLA : International Federation of Library Associations and Institutions) もこれに賛同し、教育はもちろんのこと、さまざまな社会課題に関与しているところです。

それに対して、レジリエンスにはまだ耳慣れない感じもありますが、新しい概念とってよいでしょう。現代においては地球環境の急激な変化などもあり、温暖化などによる災害や大混乱を避けるのは難しい状況になっておりまして、サステナビリティとともに、変化への対応というこの概念がさしせまったものとして認識されています。ただし、この概念は非常に広い意味合いがありまして、経済学、生態学、政治学、認知科学、デジタルネットワークなどのさまざまな分野で議論されているものであります。ここに定義を示しておきましたが、上段のものはロックフェラー財団のもので、「個人、コミュニティ、機関、企業組織、及びシステムがどのような種類の慢性的ストレスや急性のショックを経験しても生き残り、適応し、成長する力」とあります。また、下段のものは、後ほどちょっと触れるゾリとヒーリー (Andrew Zolli & Ann Marie Healy) のものであります。いずれも個人やシステムの双方のレジリエンスを問題にしており、混乱などに遭遇しても、いいかえれば、新しい状況の変化があっても、それに適応し自己の目的を達成する力、対応できる力をいうものであります。

サステナビリティとレジリエンスは、現代社会において大切な二つの視点です。実はこの両者の関係については、さまざまな議論がありますが、ここでは、この図 (図1) のように、SDGsの目標にバランスをとりつつ、つまりレジリエンスを確保して、歩んでゆく、と捉えておきたいと思えます。持続可能な開発目標を目指すなかで、襲いかかるリスクに対して、この綱渡りをしているご婦人のようにバランスを保つ、回復力、レジリエンスが必要だということです。また、サステナブルと思われる均衡点も事態の変化に応じて変動してゆきます。そうした状況に対応できることが不可欠なのであります。



図1 サステナビリティとレジリエンス

次に、図書館界においてこれまでレジリエンスがどのようにとりあげられてきたかを少しみておきます。米国、アメリカでは、ハリケーン・カタリーナやサンディのあと、前者はニューオーリンズ、後者はニューヨークを襲ったんですが、都市の復旧の大きな困難が図書館の問題としてとりあげられるようになりました。その意味合いは、ここに書いてある三つの点（①図書館は、政府とともにレジリエンス戦略に与する必要がある、②レジリエンスはコミュニティの関与が不可欠、その際に図書館は大きな役割を果たす、③レジリエンスは、公平性やアクセスという図書館の価値と合致するもの）に由来するものでありますが、少し端折って言えば、図書館はコミュニティのレジリエンスを支えるための格好の社会機関だという捉え方があります。

また、サステナビリティの後、その活動をしていたレベッカ・スミス・オールドリッチ (Rebekkah Smith Aldrich) という方が、小冊子などを著して、この活動を始めております。

もう一つは、これは2015年3月14日から18日にかけて仙台で開催された第3回国連防災世界会議に成果文書「仙台フレームワーク（仙台防災枠組2015-2030）」というのがあるのですが、そのなかに「レジリエンス」という表現が出てまいります。具体的には、四つの優先行動のなかに一つ、「レジリエンスのための災害リスクの軽減への投資」というのがあり、それを受けた七つのターゲットでは、「2030年までに保健や教育施設など重要なインフラへの損害や基本的サービスの破壊を、レジリエンスの開発を通じて、実質的に減らす」というような言葉が出ております。これをうけてIFLA、国際図書館連盟は、災害における図書館の役割というのに焦点をあてて議論を広げております。私は日本国内の図書館関係者の間で、この「仙台フレームワーク」についての反応は、あまり聞いたことがありませんが、ひょっとすると地元の柴崎さんはご存じかもしれません。

さらにもう一つ、これは、アメリカ図書館協会の企画ですが、今年レジリエンスの活動を行う図書館には、助成が行われております。図書館のプログラムでレジリエンスをとりあげていれば、一定の財政的支援があるのです。図書館界では、レジリエンスという問題について、な

お必ずしも大きな流れをつくり出しているわけではありませんが、非常に基本的な問題であり見落とせないという認識が深まっているようです。

最後に、ここに挟みましたのは、上に参照したゾリとヒーリーによって書かれた本のなかにあった指摘です（図2）。レジリエンスを高めるためにはどのように議論したらよいか、個人、社会、それぞれどのような観点で考えたらよいかということで、彼らの本にはこのスライドに描かれてるような実践例がかなり盛られています。

ちょっと駆け足で解説をいたしました。シンポジウムの趣旨として、サステナビリティ、レジリエンスという概念、図書館界でのレジリエンスの動きというのをご紹介いたしました。

早速、お二方のご報告にうつりたいと思います。人々やコミュニティの未来を確かなものにする、レジリエンスに関わる図書館活動であります。まずは、名取市図書館の柴崎さまにご講演をいただきます。

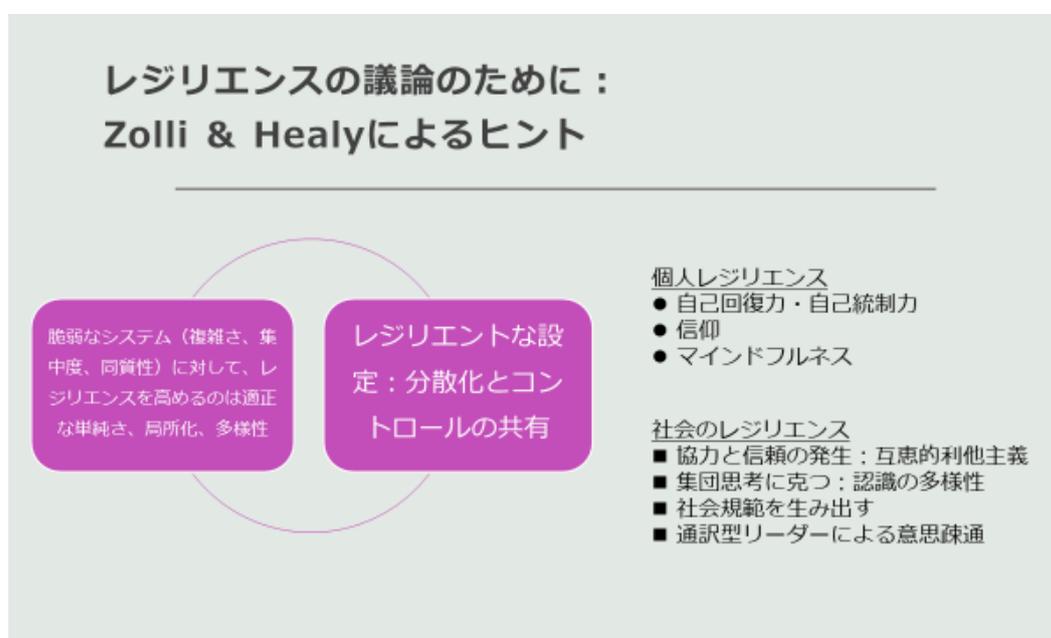


図2 レジリエンスの議論のために：Zolli & Healy によるヒント